浅野川中学校だより
あさのがわ通信

第２９号　令和７年６月２４日発行
金沢市立浅野川中学校
Email asanogawa-j@kanazawa-city.ed.jp
学校ホームページＵＲＬ
https://kanazawa.schoolweb.ne.jp/1720013

＊学校便り作成にあたり、生徒の文章や写真を使用する場合があります。浅野川中学校個人情報取扱規程を遵守しておりますが、お気付きの点がありましたら学校までご連絡ください。

6月23日「慰霊の日」を迎えて・・・

～沖縄戦から81年、私たちが受け継ぐもの～

生徒のみなさん、昨日６月２３日は沖縄の「慰霊の日」でした。今から８１年前の１９４５年、沖縄では凄惨な地上戦が行われ、住民を含む２０万人以上の尊い命が失われました。節目の８１年を迎えた沖縄全戦没者追悼式では、毎年、子どもたちの等身大の言葉で綴られた「平和の詩」が朗読されます。戦争を体験した方々が少なくなり、記憶の風化が懸念される今だからこそ、同世代の仲間が紡ぎ出した言葉は、私たちの心に強く訴えかけてきます。ここに、今年度の追悼式で朗読された「平和の詩」を掲載します。生徒のみなさんに、ぜひじっくりと読んで、心で受け止めてほしいと思います。

平和の詩「生きたいと願った証」

豊見城市立豊崎中学校２年　亀谷　琉奈

あの日の沖縄には
青い海も
優しい風もなかった
空は黒く
地面は揺れ
人々の叫び声が絶えなかった
爆撃の音が
心まで壊していく

まだ若かった曾祖母は
小さな体で必死に走った
血だらけの道を
倒れた人たちの横を
もう動かない人を見ながら
涙を流す暇もなく
ただ生きるために
そして
愛する夫の命を案じながら
「お願い　生きていて」
その想いだけを胸に
足がもつれても
呼吸が苦しくても
転びそうになっても
前へ前へと走った
しかし
その願いは
もう二度と届かなかった

その時のことを話す曾祖母の声は
今でもとても優しい
でも　私は知っている
その優しい声の奥に
今も消えない悲しみがあることを
細い足
しわしわの手
小さな背中

長い年月を生きてきたその姿を見るたび
私は戦争の重さを感じる
そして
曾祖母の右足には
今も傷が残っている
それは
戦時中　自分で引っ掻いた傷
灰色の空の下
爆撃の音が鳴り響く
恐怖と不安でいっぱいになり
右手に握った石で
自分の右足を何度も何度も引っ掻く
気づけば手も足も血だらけだった

私が真実を知った時
胸が締めつけられた
どれほど怖かっただろう
どれほど苦しかっただろう
生きたい
死にたくない
その想いだけで
曾祖母は必死に生き延びた

戦争は人を傷つける
体だけじゃない
心まで壊してしまう
家族と笑う時間
友達と過ごす日々
「また明日ね」と言える幸せ
そんな当たり前を
全て奪ってしまう
でもそれは
当たり前なんかじゃない
血と涙の中を生き抜いた人たちが
命を繋いでくれたから
今の私たちがいる

もし曾祖母が
あの日　走っていなかったら
もし
あの日　命を落としていたら
私はここにいなかった

曾祖母の右足の傷は
ただの傷じゃない
「生きたい」と強く願った証
「戦争は二度としてはいけない」
という叫び
私はその想いを
これから先も伝えていく
もう誰にも
血だらけの道を
走ってほしくないから
もう誰にも
愛する人の命が奪われることに
怯えてほしくないから
もう二度と
沖縄の空を戦争で
染めてはいけないから

平和は当たり前じゃない
たくさんの人の涙と苦しみと
「生きたい」という願いの上にある
だから私は忘れない
沖縄戦で苦しんだ人たちを
愛する人を守ろうとした想いを
泣きながら生き抜いた人たちを
そして
曾祖母の右足の傷を
「生きたい」と願った証の傷を
平和な未来へと繋いでいくために

この詩を読んで、生徒のみなさんは何を感じましたか。「戦争」と聞くと、どこか遠い昔のこと、遠い外国の出来事のように思えるかもしれません。しかし、私たちが今こうして学校に通い、友達と笑い合い、部活動に打ち込めている日々は、決して「当たり前」のものではありません。平和とは、誰かが勝手に用意してくれるものではなく、私たち一人ひとりの「心のかたち」が集まって作られるものです。友達の意見に耳を傾けること、自分の意見も大切にすること、誰かを傷つける言葉を投げかけないこと。それらすべてが、平和の第一歩です。なぜ戦争が起きてしまったのか、どうすれば防げたのか。過去を学ぶことは、私たちが未来で過ちを繰り返さないための「盾」になります。生徒のみなさんは、これからの未来を創り出す主人公です。この「慰霊の日」をきっかけに「平和の尊さ」について考えてみてください。